

笠 間 市

大淵窯跡群（B）発掘調査報告書（6）

1 9 8 7

笠 間 市 教 育 委 員 会

大波瀬跡群〈B〉発掘調査報告書〈6〉正誤表

出土遺物観察表

番号	行	正	誤
4	6	G. O. 90	—
6	1	カット	体部外面下端部に「あたり」をつける
8	1	カット	体部外面下端部に「あたり」をつける
10	3	80%	—
13	2	多方向の静止観割り調整	多方向の静止観切り調整
21	5	高台は「ハ」の字状	高台は「11」の字状
23	4	体部外面は	大部外面は
23	6	端部に凹をなす	端部に凸をなす
25	2	70%	—
28	1	右回転ロクロ成形	右回転ロクロ
34	4	カット	口絵部内面から体部外面にかけて

笠間市文化財調査報告書一覧

集録	報 告 書 名	調 査 主 体	発行年月日	付 記
		調 査 担 当		
1	箱田四所神社 境内古墳調査報告書	北山内村役場	昭28. 2.	茨城中学校 考古学クラブ
		大森 信英		
2	うら山古墳 石井台平安時代集落跡調査 報告書	笠間市教育委員会	昭47. 3. 30	50号バイパス
		大川 清		
3	石井台遺跡発掘調査報告書	笠間市教育委員会	昭59. 11. 12	かまげん建設 予定地
		萩原 義照		
4	上郷遺跡発掘調査概報	笠間市教育委員会	昭60. 12. 1	市道改良工事
		萩原 義照		
5	笠間大淵窯跡	笠間市史編さん室	昭61. 3. 31	学術調査
		外山 泰久		
6	大淵窯跡群（B）発掘調査 報告書	笠間市教育委員会	昭62. 3. 31	市道改良工事
		萩原 義照		

1. 調査に至る経過

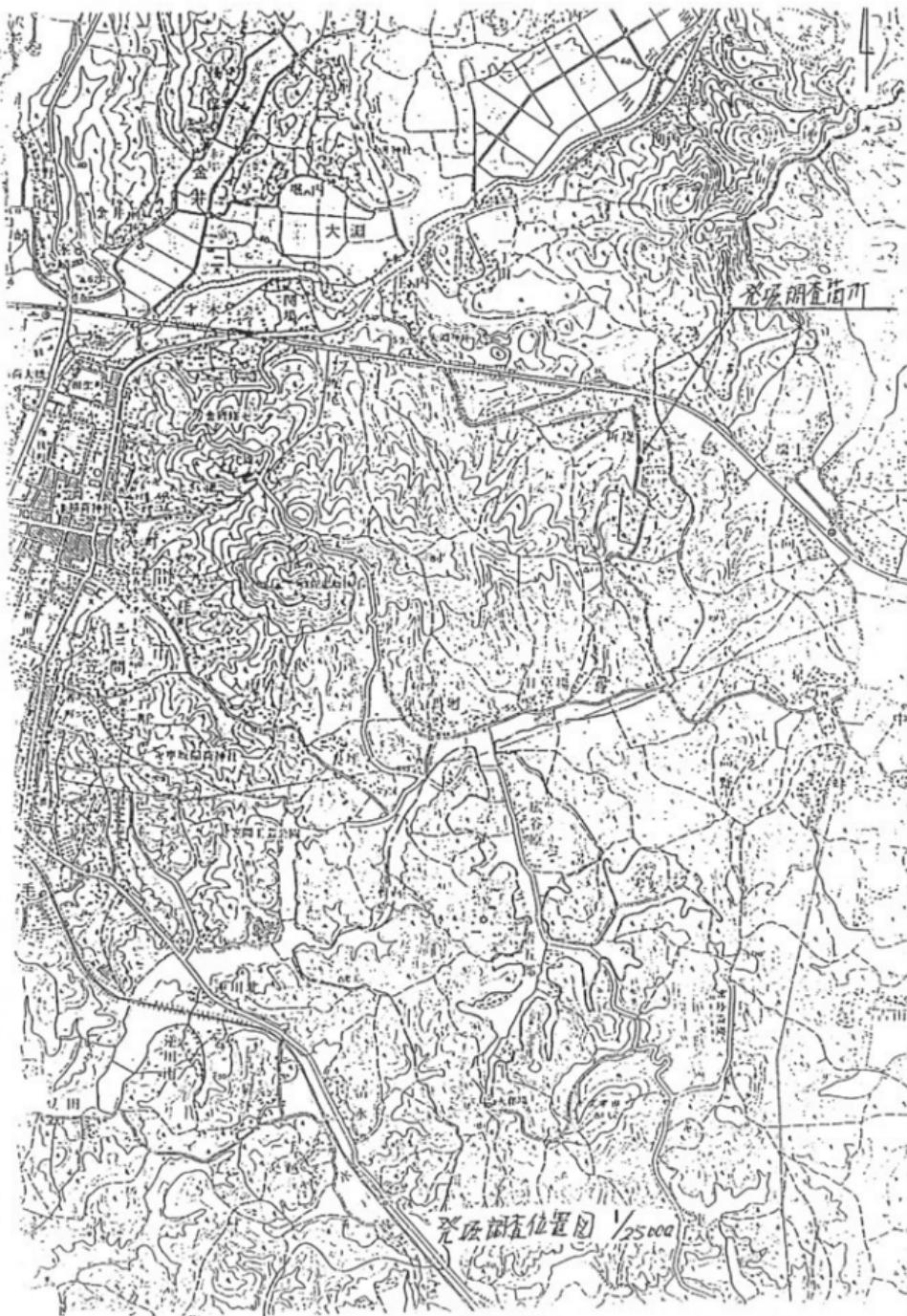
大淵窯跡群A・B・Cの所在する笠間市は、昭和33年8月隣接する町村を合併して誕生した。笠間市に確認されている須恵器窯跡群は、佐白山(182m)の北東部、友部町上市原と境して、国道50号線の両側台地斜面にA・B・C3地点の窯跡が所在する。その範囲については、明確にされていない。

窯跡Aは、国道50号線北側の台地斜面に所在(笠間市大淵6~36外)する。ここは、笠間市史編さん古代・中世史料として、昭和61年7月から10月にかけて、学術調査による発掘調査したところである。

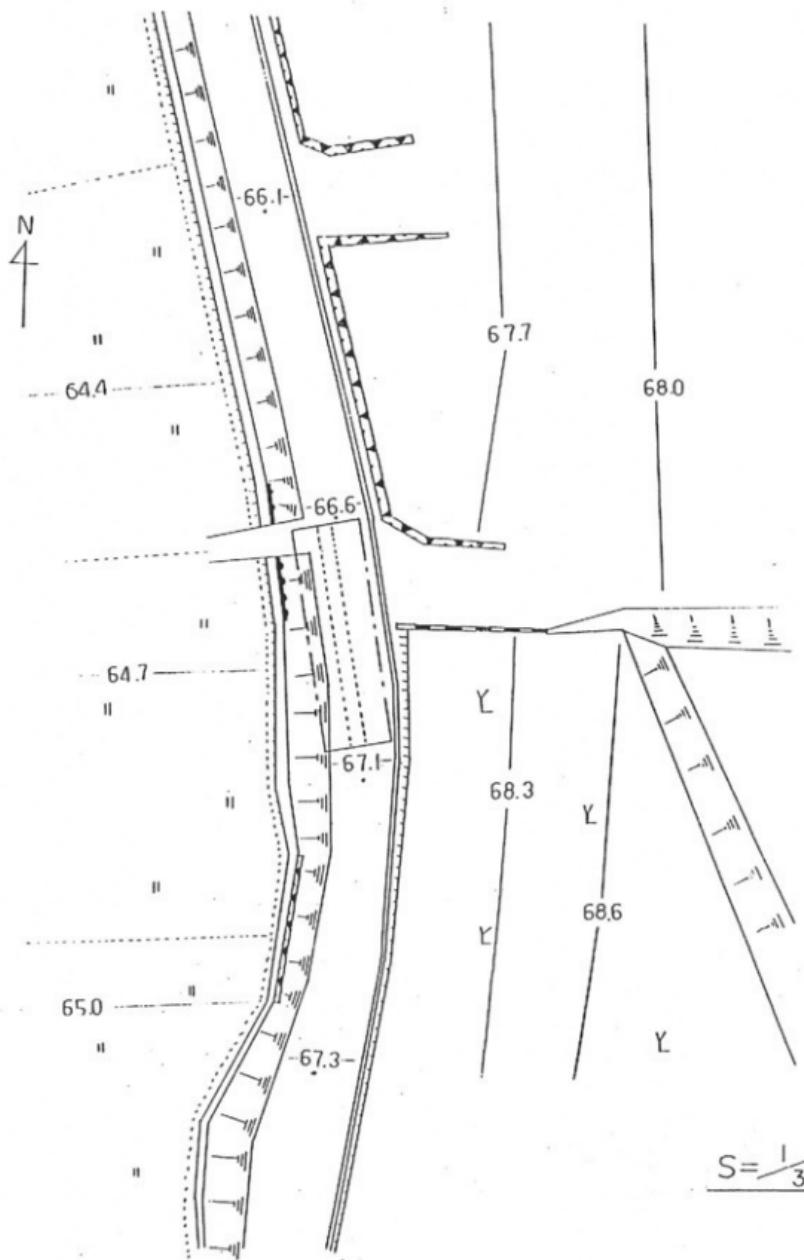
窯跡Bは、国道50号線南側、笠間自動車学校のある台地の南東部を通る市道新堤ー日草場線北側斜面に所在(笠間市笠間字長呂比4194番地先)する。

窯跡Cは、市街に向かう国道50号線左側の畑地や水田の一部に所在(笠間市大字笠間4026-2番地外)する。

今回、笠間市において、補助事業による市道新堤ー日草場線の改良工事が計画された。このため市建設課は、埋蔵文化財所在の有無とその取扱いについて、市教育委員会に照会した。これをうけた市教育委員会は、直ちに現地B遺跡を調査した。その結果、笠間自動車学校手前の現道路敷の一部は、窯跡Bの範囲内にあることを確認した。そこで、市教育委員会は、工事担当の建設課と、遺跡の取扱いについて協議し、急拠土木工事に併行して発掘調査を実施することにした。



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形と発掘区域

2. 発掘調査の経過

本窯跡は、市の東端長呂比に所在し、南東に面する台地斜面の裾部で市街に向かう国道50号線から左手自動車学校に通じる市道の先端部に位置している。道路の右側は水田に面し、その比高差約3m、標高67.7mを測ることができる。

窯跡は、現道路敷を含む北側傾斜部を利用して構築された登窯ではないかと思われる。現道路建設や、自動車学校敷地造成に際し、広範囲に斜面が削り取られた。

発掘現場を見学にきた自動車学校職員の話によると、昭和48年頃、自動車学校の道路側の土止め工事のとき、焼土、炭化物に混じって多数の須恵器の破片が出土したといわれる。また、現道路北側斜面畑地や、南側法下の水田にかけて須恵器片が採集されている。以上の見地から本窯跡は、現道路沿い北側斜面に何基かの須恵器窯跡が所在することは間違いない。

今回の調査は、道路改良工事と併行しての発掘調査のため、まず、重機によって現道路面のアスファルトを掘削除去し、遺構の確認を進めた。予想としては、多分灰原の一部が存在するのではないかと思っている。何分調査範囲が小さいので、成果の期待はうすい。

○12月12日（土） 曇

笠間市教育委員会文化財担当堀沢主査、市建設課小池主査によって、調査区を現道路面（3m×15m）に設定し、杭打ちを行う。

○12月15日（火） 曇

調査前の遺跡及び周辺の写真撮影、地形測量、標高測定を行う。

○12月17日（木） 晴

本日から作業開始、市教委社会教育課、市建設課の応援によって発掘作業を行う。現道路面のアスファルト掘削除去は、宮本工務店の重機（バックホー）によって、厚さ30cmのアスファルトを除去する。

◎発掘調査参加者 河村教育次長、雨海社教課長補佐、社教文化財担当堀沢主査、建設課小池主査外3名

道路表面削除後、更に1mの深さまで順次分層の削除土を行う。調査東端に青白色の粘土層、焼土確認、須恵器破片焼土内炭化物に埋土。

○12月18日（金） 晴

発掘参加者、調査員中山仁美、補助員社教堀沢主査、市史編さん室大島室長、同大高嘱託、建設課小池主査外3名と除土作業を西方に移し、土層を観察する。炭化物混在の土層中から、焼土、多数の須恵器破片（蓋・坏・盤・ツボ・カメ等）が出土。写真撮影 午後見学者 市長、河村教育次長、自動車学校職員3名

○12月19日（土） 晴

発掘参加者、社教雨海、堀沢、市史編さん室大島、大高、建設課小池外南側壁面、東側壁面のセクション図作成、写真撮影、調査区全体測量

○12月20日（日） 休み

○12月21日（月） 晴

発掘参加者 調査員中山仁美、社教堀沢、市史編さん室大島、大高、建設課小池外

調査区の清掃、焼土塊、周辺実測、遺物収納

○12月22日（火） 晴

調査終了に伴う全体の見直し、遺物の収納、埋め戻し。

午後、遺物の整理、報告書のまとめ等について、中山調査員文化財担当
姫沢主査と打合せ。 以上

3. 遺構について

本調査においては、現道路敷下の一部の発掘調査で、窯跡の全体を知ることはできない。しかし、焼土、炭化物混在の堆積土層と、須恵器破片が多数埋土されて検出されたことからみて、本遺構は、灰原の一部であると思われる。発掘を更に道路北側の斜面に広げることができれば、焚口部は近くに確認することも可能であるし、窯跡Bの性格、特徴を把握することができると思われる。

灰原とは、須恵器清算において焚口部を開き、前面にかき出した灰が扇状に堆積されたところを呼んでいる。またの灰原には、製品の失敗品の捨場にもなっているので、ここから貴重な須恵器の破片が発見される場合もある。

遺跡の灰原から出土、採集された遺物は、すべて須恵器の破片で、器種としては、盤・壺・高台付壺・壺・甕などの破片である。

遺物については、中山仁美調査員によって整理された詳細な観察記録を参考にされたい。

遺物について

本遺構の出土遺物は全て須恵器である。器種とその出土破片数は表1のとおりである。また壺と高台付壺を中心とした器種の底部外面に(1)籠書きによる「一」、「七」、「十」などの漢用数字や、「×」、「り」などの籠記号が5種11点（うち4点については破片のために識別が不可能）が確認された。 表2

これら出土遺物の実年代を検討するために、比較的出土点数の多かった壺、高台付壺、盤をそれぞれ器形ごとに分類し、また壺については手法などの比較も行なった。 表3

そして、この検討に際しては、笠間市大淵窯跡群（A地点）を中心(2)に、近接し既に調査報告されている岩瀬町堀ノ内古窯跡群や水戸市木(3)葉下遺跡（窯跡）を基準にした。

表1 出土器種と破片数

器種	蓋	壺	高台付壺	盤	高盤	短頸壺	長頸壺	甌	甕	合計
破片数(点)	35	62	45	51	1	7	4	49	298	552

表2 篠記号表

記号 器種	一	七	十	×	り	不 明	計
壺	2				1	4	7
高台付壺		2	1	1			4
合計	2	2	1	1	1	4	11

表3 グループ別による手法の比較

手法 グループ 実測 図番号		「あたり」の有無	底部の切り離し	底部の調整の有無とその調整
A	5 6	× ○	回転窓切り 〃	○ 一部窓ナデ ○? 一部窓ナデか
B	7	○?	〃	×
	8	○	〃	×
	9	○?	〃	×
	10	○?	〃	○? 一部回転窓削りか
	11	○?	〃	×
C	12	×	〃	○ 静止窓削り（一方向）
	13	○	〃	○ 静止窓削り（多方向）
	14	×	〃	×
	15	○	〃	○ 回転窓削り
	16	○	〃	○ 回転窓削り
D	17	×	〃	×
	18	×	〃	○ 静止窓削り（二方向）
	19	×	不明	不明
	20	×	回転窓切り	×

坏 (第6図5~20)

Aグループ 体部が丸味のある形を示す。(5・6)

Bグループ Aグループよりわずかに体部が伸びる形を示す。

(7~12)

Cグループ 体部が外上方にまっすぐに伸びてくるが、器高が低い。(12~16)

Dグループ 体部がまっすぐに伸び、器高が増し、底径が縮小する。(17~20)

高台付坏 (第7図21~24)

法量の差は見られるが器形はほぼ同一であり、時期的な隔たりは、ほとんど認められない。

盤（第7図25～30）

Aグループ 底部が扁平である。（25・26）

Bグループ 底部が深くなる。（27～30）

以上のことから本遺構である大淵窯跡（B地点）出土の壺は、AグループからDグループへと次第に変化していったと見られる。これらの壺は大淵窯跡（A地点）灰原出土の壺と器形が酷似するが、底部外面の調整を比較すると、A地点出土の壺は切り離しの際の回転箇切り痕を残し無調整のものが圧倒的に多いのに対して、B地点出土の壺はほぼ半数が静止箇削り調整や回転箇削り調整がなされている。

グループ別に見るとAグループの壺は、器形をおおまかに識別した（5）

とき、木葉下遺跡E3号窯出土の壺Aや、堀ノ内古窯跡群花見堂支群（6）1号窯出土の壺AⅢと類似する。Bグループの壺は木葉下遺跡E6号窯出土の壺Aと類似するが、底部の法量がE6号窯のものよりやや縮小されている。Cグループの壺と花見堂支群4号窯出土の壺AⅢを比較すると、その器形は類似しているがCグループの壺の方がやや新しいものと考えられる。また、木葉下遺跡E5号窯出土の壺Aと類似点が見られ、底部の調整もCグループのほとんどに、静止箇削り調整や回転箇削り調整が見られるようになる。Dグループの壺は底径がさらに縮小されてくる。これらは第6図（18）の壺を除くと花見堂支群C地点出土の壺AⅢと法量の上からも類似するものである。

次に高台付壺は大淵窯跡（A地点）灰原出土のものと酷似し、ほぼ平行して製作されたと推察できるものが含まれている。また、花見堂支群C地点出土の壺BⅠ、壺BⅢ、同2号窯出土の壺BⅣと類似する。

盤は壺のC、Dグループと同時期に製作されたものと思われるが、第7図（30）は口縁部を欠き形態が明瞭ではないが、盤のBグル

アのうち最も新しいものと見ることができ、笠間市石井台遺跡出土の盤と類似すると思われる。

以上おおまかではあるが検討を試みてきた。このことから笠間市大淵窯跡（B地点）灰原出土の須恵器を、8世紀中葉後半から遅くとも9世紀初頭までに製作されたものと推定する。

(中山仁美)

注

- (1) 外山泰久『木葉下三ヶ野窯跡出土の底部ヘラ記号』茨城県遺跡地名表 1983
- (2) 須恵器窯跡地でA地点は1986年に発掘調査された。B地点より北東方向直線距離にして650mに位置する。
- (3) ①高井悌三郎・藤田清「常陸堀ノ内古窯址群調査概報Ⅰ—花見堂古窯址—」「常陸堀ノ内古窯址群調査概報Ⅱ—花見堂古窯址その他—」『甲陽史學』四 1958
 ②高井悌三郎他「常陸国新治郡上代遺跡の研究Ⅱ」『甲陽史学会』1988
- (4) ①「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」6（木葉下遺跡Ⅰ窯跡）『茨城県教育財團文化財調査報告』第21集（財）茨城県教育財團 1983
 ②「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」8（木葉下遺跡Ⅱ窯跡）『茨城県教育財團文化財調査報告』第26集（財）茨城県教育財團 1984
 ③水戸市木葉下遺跡発掘調査会『常陸木葉下窯跡』—水戸西流通センター建設工事に伴う埋蔵文化財（須恵器窯跡）調査

記録—1986

(5) 注(4)の②と同じ

(6) 注(3)の②と同じ

(7) 笠間市教育委員会『石井台遺跡発掘調査報告書』(笠間焼
販売センターかまげん建設地) 1984

遺物の記載方法

1. 挿図、観察表、写真図版における出土遺物に付した番号は、同一番号とした。

2. 遺物は、1/3の縮尺とした。

3. 出土遺物観察表の法量(cm)の略号は次のとおりである。

A 口 径 F つまみ径

B 器 高 G つまみ高

C 底 径

D 高台径

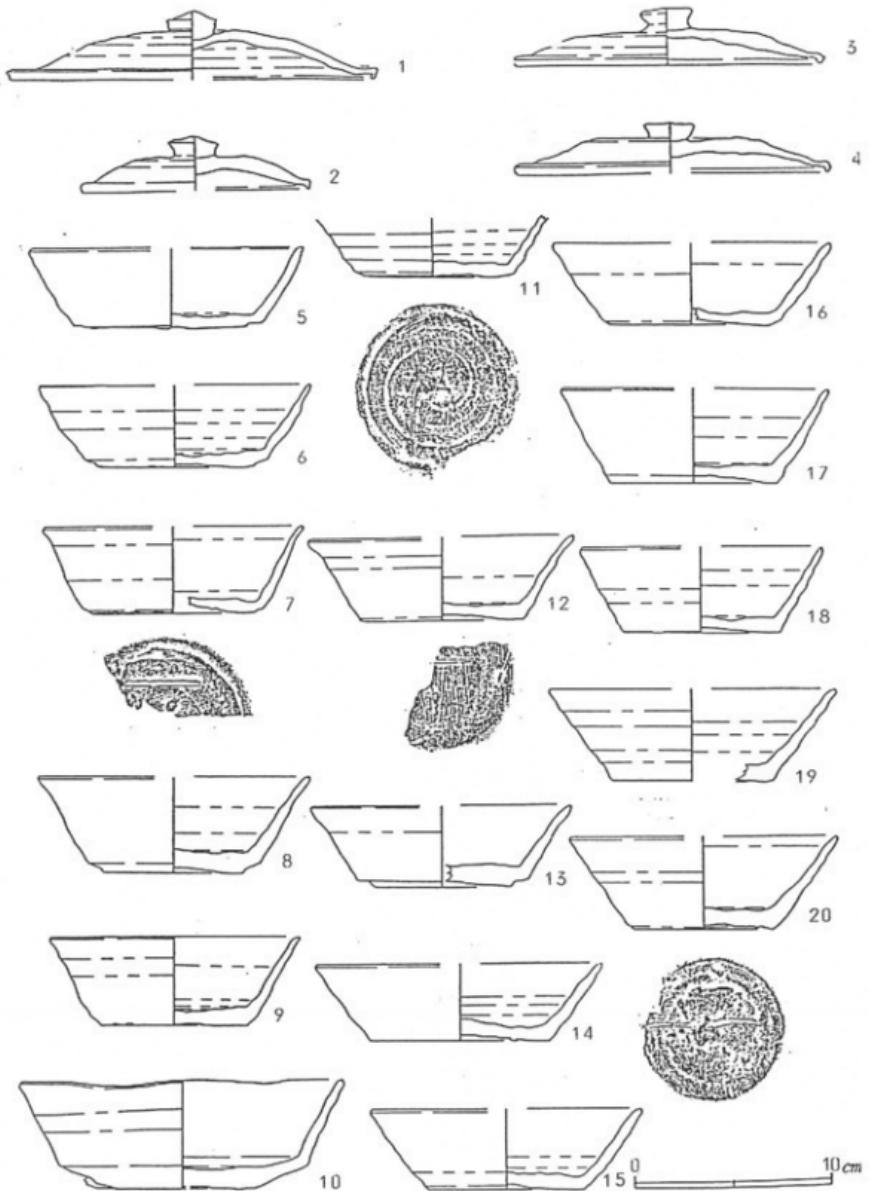
E 高台高

()は推定径・遺存高を表す。

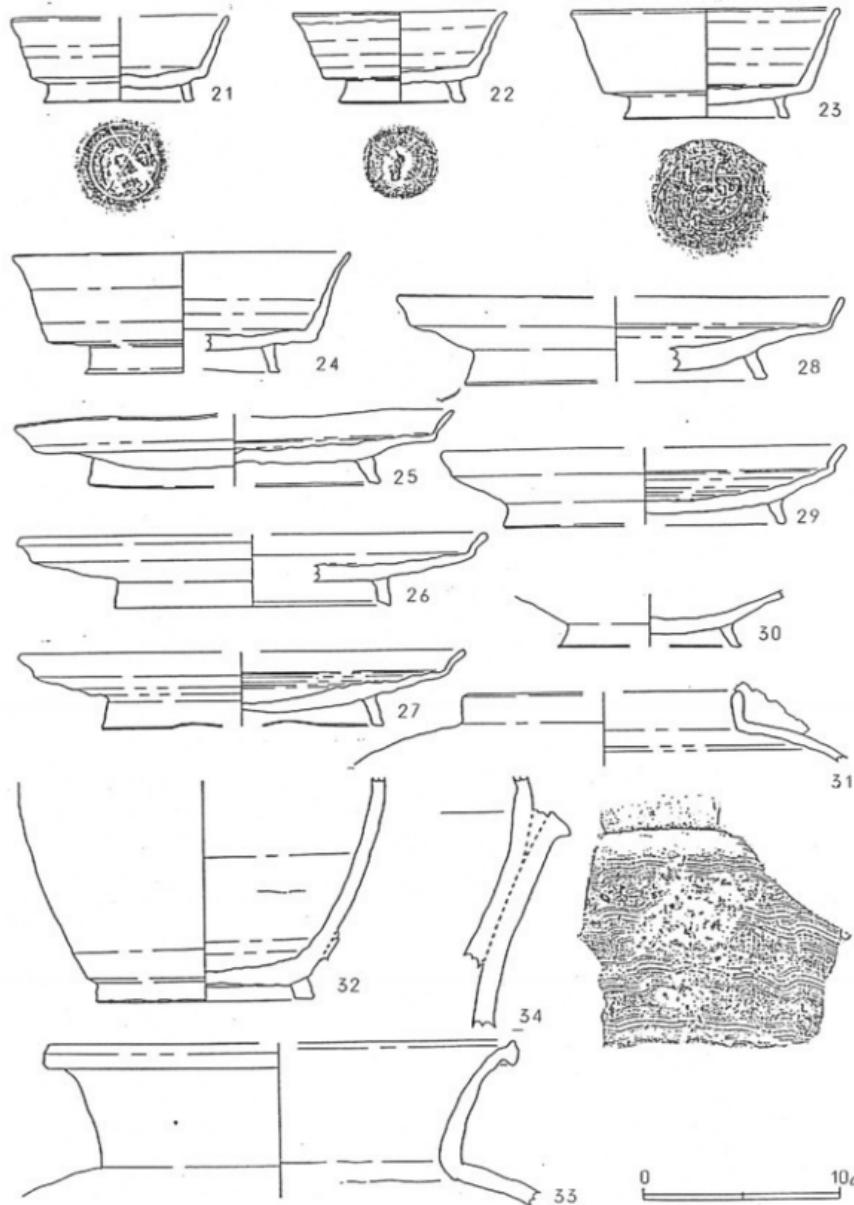
4. 色調は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』財團法人日本色彩研究所を用いた。

()は内面の色調を表す。

5. 備考欄の百分率は残存率である。

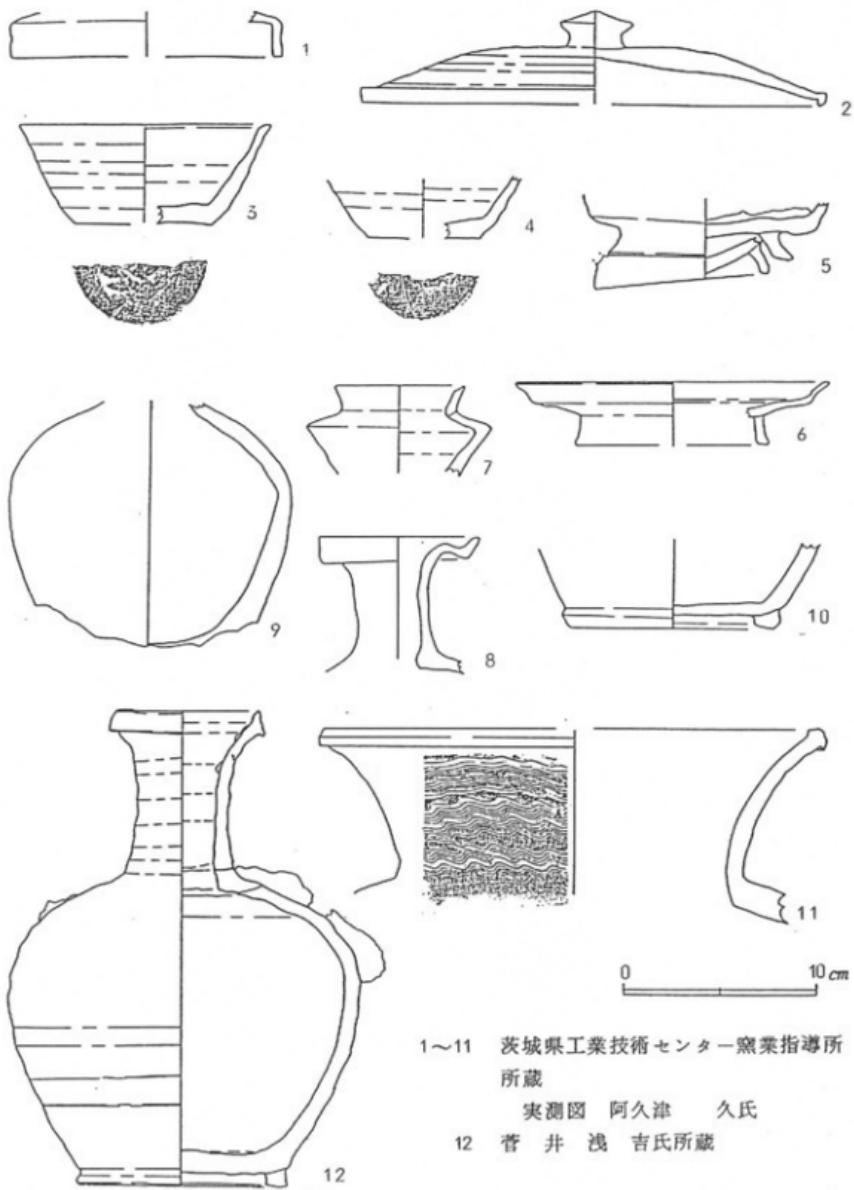


第 6 図 灰原出土遺物実測図(I)



第 7 図 灰原出土遺物実測図(2)

0 10 cm



1~11 茨城県工業技術センター窯業指導所
所蔵

実測図 阿久津 久氏

12 菅井浅吉氏所蔵

第8図 参考資料遺物実測図(大湖窯跡群B地点)

山 士 猛 物 觀 察 表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手方法の特徴	胎生色調・発育	備考
1	蓋	A (18.50) B 3.50 C 2.55 D 1.20	天井部中央に瘤平な宝珠形のつまみが付く。喉ぐるみはやや大きめ、口唇部との境界に明瞭な縁を持つ。天井部は下方向に屈曲し、喉部は、やや尖る。	右回転ロクロ成形。つまみは貼り付けられる。天井部中央位は回転割離調整。天井部は内・外側擦ナデ調査。	細砂・砂粒 オリーブ灰色 普通	外面に重ね焼き 眞珠灰 25%
2	蓋	A (11.60) B 2.80 C 2.50 D 1.00	小型の蓋。つまみが付く。天井部はやや丸く口唇部との境界にやや明瞭な縁を持つ。口唇部は下方向に屈曲し、喉部はやや尖る。	右回転ロクロ成形。つまみは貼り付けられる。天井部中央位は回転割離調整。内面はロクロ目を残さない。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 50%
3	蓋	A 15.40 B 2.60 C 2.60 D 1.10	天井部中央に瘤平なつまみが付く。天井部は瘤平で口唇部との境界にやや明瞭な縁を持つ。口唇部は頗る下方に向曲し、喉部はやや尖る。	右回転ロクロ成形。つまみは貼り付けられる。天井部中央位は回転割離調整。天井部は内・外側擦ナデ調査。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 40%
4	蓋	A 15.70 B 2.60 C 2.50	天井部中央に瘤平なつまみが付く。天井部は瘤平で口唇部との境界にやや明瞭な縁を持つ。口唇部は下方向に屈曲し、喉部はやや尖る。	右回転ロクロ成形。つまみは貼り付けられる。天井部中央位は回転割離調整。天井部は内・外側擦ナデ調査。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 40%
5	环	A 13.85 B 4.10 C 9.55	底部は平底。体部は内側しつつ立ち上り、口唇部はやや丸い。	右回転ロクロ成形。底部は回転割離後、一部擦ナデ調査。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 50%
6	环	A (13.80) B 4.20 C 8.05	底部は平底。体部は内側して外上方にのび、口唇部はやや強く屈曲部は丸い。	右回転ロクロ成形。体部外面下部は回転割離後、一部ナデ調査。他は内・外側擦ナデ調査。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 50%
7	环	A (13.15) B 4.40 C (9.10)	底部はやや豊り上がった平底。体部はやや外側気味に外上方にのび、口唇部はやや丸い。	右回転ロクロ成形。底部は回転割離後、「あたり」回転割離。底部は厚く「あたり」回転割離。他は内・外側擦ナデ調査。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 30%
8	环	A (13.80) B 4.85 C 7.10	底部は中央が豊り上がった平底。体部は外側気味に外上方にのび、口唇部はわざわざかに外反し、喉部はやや尖る。	右回転ロクロ成形。底部は回転割離後、内・外側擦ナデ調査。他は内・外側擦ナデ調査で、ほどロクロ目を残さない。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 60%
9	环	A 12.65 B 4.50 C 7.45	底部は平底。体部は外側気味に外上方にのびる。底部はやや丸みを帶びた平底。体部は外側気味に外上方にのびる。	右回転ロクロ成形。底部は回転割離後、一部擦ナデ調査で、体部は厚く「あたり」回転割離。他は内・外側擦ナデ調査目を残さない。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 70%
10	环	A 16.40 B 5.50 C 12.70	大型のが、底部はやや丸みを帶びた平底。底部は外側気味に外上方にのびる。	右回転ロクロ成形。底部は回転割離後、内・外側擦ナデ調査で、体部は厚く「あたり」回転割離。他は内・外側擦ナデ調査目を残さない。	細砂・砂粒 灰褐色 普通	内・外面に重ね焼き 眞珠灰 50%

山土達生物観察報告書

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	手方法の特徴	底部外面に銘記
11	坏	B (3.00) C 3.20	底部は平底。体部は内豊氣味に右回転口横部には外傾。	底部は回転口成形。底部は回転口横部には外傾。	細砂・砂粒・礫 灰褐色 普通 40%
12	坏	A (13.40) B 4.20 C (8.00)	底部はやや盛り上がりがあった平底。体部は内豊氣味に立ち上がりがある。中より外反し、口横端部はやや丸い。	ロクロ成形。底部は回転口切り。後、一方向の停止端ナテ隔壁。	細砂・砂粒・礫 灰色 普通 30%
13	坏	A (13.10) B 4.10 C (7.00)	底部は平底。体部はわがからに内豊して外上方に立ち上がりがある。かくく外反して端部はやや丸い。	ロクロ成形。底部は回転口切り。後、多方向の停止端ナテ隔壁。	細砂・砂粒・礫 灰色 普通 30%
14	坏	A (14.50) B 3.90 C 9.10	底部は中央が盛り上がりがあった平底で、底部と体部の境界は底く明かな角度で分かれ。体部は外傾して外上方にのび、口横端部はやや尖る。	右回転ロクロ成形。底部は回転口切り。内面は側ナテ隔壁。	細砂・砂粒 灰色 良好 (二次焼成か) 50%
15	坏	A (13.70) B 4.05 C 7.90	やや浅いが、底部は平底。体部は外傾して外上方にのび。口横端部は丸い。	右回転ロクロ成形か、底部は回転口切り後、回転削削り切り。底部は回転口切り後、底部はロクロ口目を残さない。	細砂・砂粒 灰白色 やや不良 50%
16	坏	A (13.90) B 4.15 C 8.10	底部は平底。体部はやや内豊氣味に外上方にのび。口横端部は丸い。	右回転ロクロ成形。底部は回転口切り。内面は側ナテ隔壁。底部はロクロ口目を残さない。	細砂・砂粒 灰色 普通 45%
17	坏	A (13.40) B 4.80 C 8.60	底部は中央が盛り上がりがあった平底で、底部と体部の境界は明瞭な角度で分かれ。体部はやや内豊氣味に外上方にのび、口横端部はやや尖る。	ロクロ成形。底部は回転口切り。後、二方向の停止端ナテ隔壁。底部はロクロ口目を残さない。	細砂・砂粒 灰色 普通 30%
18	坏	A (14.05) B 4.35 C (8.15)	底部は平底で、底部と体部の境界は鈍く明瞭な角度で分かれ。体部はやや内豊氣味に外上方にのび、口横端部はやや尖る。	ロクロ成形。底部は回転口成形。底部は回転口切り。後、一方向の停止端ナテ隔壁。	細砂・砂粒 灰色 普通 40%
19	坏	A (14.35) B 4.65 C (8.15)	底部は平底で、底部と体部の境界はやや内豊氣味に外上方にのび、口横端部はやや尖る。	右回転ロクロ口成形。底部は厚く作り、回転端切り。底部は不明。底部は内・外側ナテ隔壁で、ロクロ口目を残す。	細砂・砂粒 灰色 良好 (焼成色) 25%
20	坏	A (13.40) B 4.70 C 7.00	底部は平底で、底部と体部の境界はやや内豊氣味に外上方にのび、口横端部はやや尖る。	右回転ロクロ口成形。底部は厚く作り、回転端切り。底部は内・外側ナテ隔壁で、内面はロクロ口目をほとんど残さない。	細砂・砂粒 灰色 良好 内面は黄土色の自然釉 底部外面に銘記 号「-」 50%

表 索引

番号	器種	法墨(cm)	形態の特徴			手法の特徴	備考
			底部外面上に鶯記 号「×」	底部外面上に鶯記 号「○」	底部外面上に鶯記 号「○」		
21	高台付环	A (10.85) B 4.30 C 7.50 D 1.00	小型の高台付环。底部と体部は回転 筋切り。他は内・外側気味に上方方に 凹凸部は強く外傾し、体部はほとんどロク ロ目を残さない。高台は貼り付ける。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 70%
22	高台付环	A 10.85 B 4.50 C 6.25 D 1.15	小型の高台付环。底部はやや厚 い。体部は内側気味に上方方に 凹凸部は強く外傾し、端部はやや尖る。 高台は「ハ」の字状にする。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 黄土色の自然釉 70%	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 60%
23	高台付环	A 13.40 B 5.50 C 8.35 D 1.70	底部と体部の境界は強く明瞭な 筋を有する。体部はやや内側気味 に上方方にのび、口唇部は外 に外傾し、端部はやや尖る。高 台は「ハ」の字状にする。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 50%
24	高台付环	A 17.50 B 6.50 C (9.80) D 1.50	底部と大部の境界は強く明瞭な 筋を持つ。体部はやや内側気味 に上方方にのび、口唇部は外 に外傾し、端部はやや尖る。高 台は「ハ」の字状にする。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 40%
25	整	A (22.05) B 3.55 C (14.70) D 1.35	底部は外反氣味に上方方に大き く開く。体部と口唇部は外反し 明瞭な筋を持つ。口唇部は外反 して端部はやや尖る。高台は「ハ」 の字状にする。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 25%
26	整	A (23.50) B 3.60 C (14.00) D 1.30	体部は内側気味に上方方に大き く開く。体部と口唇部は外反し 明瞭な筋を持つ。口唇部は外反 して端部は丸い。高台は墨下し端 部にややくぼんだ面をなす。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 40%
27	整	A (22.40) B 3.75 C (14.85) D 1.50	体部は内側気味に上方方に大き く開く。体部と口唇部は外反し 明瞭な筋を持つ。口唇部は外反 して端部は丸い。高台は「ハ」 の字状にする。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 40%
28	整	A (22.20) B 4.60 C (14.85) D 1.60	体部は外反氣味に上方方に大き く開く。体部と口唇部は外反し 明瞭な筋を持つ。端部はやや尖る。 高台は「ハ」の字状にする。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 30%
29	整	A (21.10) B 4.00 C 13.85 D 1.40	体部は内側気味に上方方に大き く開く。体部と口唇部は外反し 明瞭な筋を持つ。直ちに外傾する。 口唇部は丸く、高台は丸くふ んぱり端部にやや丸い面をなす。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底部外面上に鶯記 号「×」 底部外面上に鶯記 号「○」 60%
30	整	か	B (2.50) C (3.10) D 1.20	底部は厚く、体部は内側気味に 上方方にのびる。端部は外下方に開 き、端部に面をなす。	細沙・砂粒 灰白色 普通	胎土・色墨・施成 灰白色 良好	底台 燒台 (二次焼成)

上 土 潤 物 觀 察 記

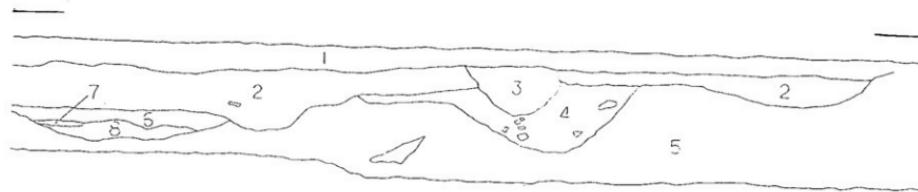
番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
31	短頸並	A (13.60) B (3.70)	強く内壁する体部から口縫部は垂直に立ち上がり、端部はいい。全体に導手。	内・外面は焼ナナ形態。 良好	細砂・砂粒 灰白色	滑塗付着
32	並	B (11.10) D (11.05) E 1.00	口縫部から頸部は久掛、体部は内壁しつつ立ち上がる。 基台は「ひ」の字状に外下方に開き短部に面をなす。	粘土疊積み上げ成形。内面に粘土疊積を覆す。 良好	細砂・砂粒 黒褐色(灰色) 底部内面と体部外面上に黒色ドロ状の自然釉	豊と重ね焼きか 壁の口縫部付着
33	丸	A (23.40) B (7.60)	強く内壁する体部から「く」の字状に屈曲する口縫部が付く。 口縫部は下方向に広がる。	粘土疊積み上げ成形。内・外面は焼ナナ形態。	細砂・砂粒 灰白色(黒褐色) 良好	
34	丸	B (10.90)	口縫部の一部。	粘土疊積み上げ成形。外面上にクシ状工具による波状紋を施す。	細砂・砂粒 灰褐色(二水鉛) 底又は雙片付着	口縫部内面から 体部外面上にかけて

卷之三

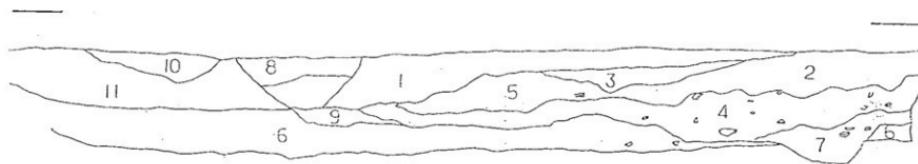
番号	種類	法量(cm)	手 法 の 特 標	胎土・色調・焼成 備 考
1	蓋	A (13.90) B (2.20)	天井部はやや扁平と思われ、口 筋部は下方向に屈曲し、端部に つまみは欠損。	ロクロ成形。天井部には焼成 内・外表面は焼成。内・外表面は焼 成。
2	蓋	A (23.30) B 4.85 F 3.70 G 1.90	天井部中央にやや偏平な宝珠形 孔。天井部はやや丸い。 口筋部は下方向に屈曲し、 端部はやや丸い。	ロクロ成形。 つまみは貼り付けた。 天井部には回転削り凹部。 内・外表面は焼成。
3	环	A 12.30 B 5.00 C (6.95)	底部は平底。 底部はやや内豊気味に外上方に のび、口筋端部はやや丸い。 口筋部は欠損。	ロクロ成形。 底部は平底。 底部は回転削り凹部。 内・外表面は焼成。
4	环	B (2.90) C (5.55)	小型の环。 底部は平底で、全体はやや内豊 気味に外上方にのびると思われる。 口筋部は欠損。	ロクロ成形。 底部は内豊気味に外上方にのび ると思われる。 全体はやや内豊気味に外上方にの びる。 口筋部は欠損。
5	高台付环	A B D E	体部は内豊気味に外上方にのび ると思われる。 全体は(ハ)の字状に外下方に向 くものとやや丸くなるもので、 いずれも端部に面をなす。	ロクロ成形。 自然釉のために調整不明。 全体接着着。
6	盤	A 15.85 B 3.20 D (9.70) E 1.55	体部は外反気味に外上方に大きく く開く。全体と口縁部の境界に やや明瞭な線を持つ。端部はや や丸い。 口縁部は外反して端部はや や丸い。	ロクロ成形。 高台は貼り付けた。 端部は焼成。
7	短 頸 盤	A 6.40 B (4.50)	全体は内豊気味に外下方に開き、 口縁部は外反して立ち上 がり、端部はやや尖る。 底部は欠損。	ロクロ成形。 内・外表面は焼成。
8	長 頸 盘	A 8.00 B (6.30)	頸部はほぼ直面に立ち上がるが、 口縁部は外傾して短く外上方に のび、端部はやや丸い。 大部は欠損。	粘度調整上げ成形と思われる。 外表面は焼成。
9	盤	B (12.35)	長頸盤と思われる。 全体のみ。 端部は内豊しつつ立ち上がり、 肩で大きく張る。	粘土混入上げ成形か。 内・外表面は焼成。
10	盤	B (4.30) D 10.30 E 1.00	全体は内豊しつつ立ち上がるよ うである。 高台は短く直し、端部にやや 丸みを帯びた面をなす。	粘土混入上げ成形か。 内・外表面は焼成。

参考資料 漢物観察表

番号	器種	法量(cm)	手法の特徴	胎土色調・焼成 備考
11	甕	A 25.00 (8.20) B	内側する体部からく(10)字状に 屈曲する口唇部が付き、外縁部 はわずかに垂下する。 粘土混入上げ模形。 内面は撚ナテ隔壁。 外面にクシ状工具による波状紋 を施す。	細め・芯粒 黒灰色 良好
12	長頸甕	A 7.4 B 24.1 C 10.8 D 0.95 E	体部は内側しつ立ち上がり肩 で大きく張る。頸部は内側気孔 に立ち上がりが中位より外反し、 口唇部に至つて下方に向ひながり 面をなす。高台は垂下し、端部 に面をなす。体部は一面火照。 (三段焼成)	細め・芯粒・長 石粒多 灰色(青灰色) 良好 内・外面に自然 釉



第3図 東側(A)セクション図



第4図 東側(B)セクション図

東側セクションA

1. 黒色土
2. 焦土混・炭灰
3. 焦土混・炭灰・土器埋土
4. 粘 度
5. ローム内に粘度ブロック
6. ロームに粘土混
7. 粘 土
8. ローム内に黒色土混

東側セクションB

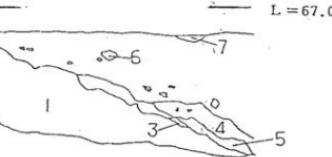
1. ローム上層からの流れ
2. ローム層に焦土混在
3. 黒褐色土内に墨焼(混)
4. 焦土・墨混在(少量)
5. 焦土なし
6. 粘 土 層
7. 粘土層彫り込み 焦土混在
土器埋蔵 粘性(弱)
8. ローム層からの流れ
9. 青粘土ブロック
10. 硬く締まっている・茶褐色
11. 焦土極少混 黒色 粘性(有)

南側セクション

1. 粘 土 層
2. 焦土 硬く締まっている
3. 焦土 帯状に流入
4. 焦土・灰混在(少量)
5. 焦土・灰・粘土混在(少量)
6. 不明ブロック
7. 粘土流入

$S = \frac{1}{100}$

$L = 67.09\text{ m}$



第5図 南側セクション図



大渕窯跡(B地点)の現況



灰原の状況(北側より)



FUJICOLOR 87

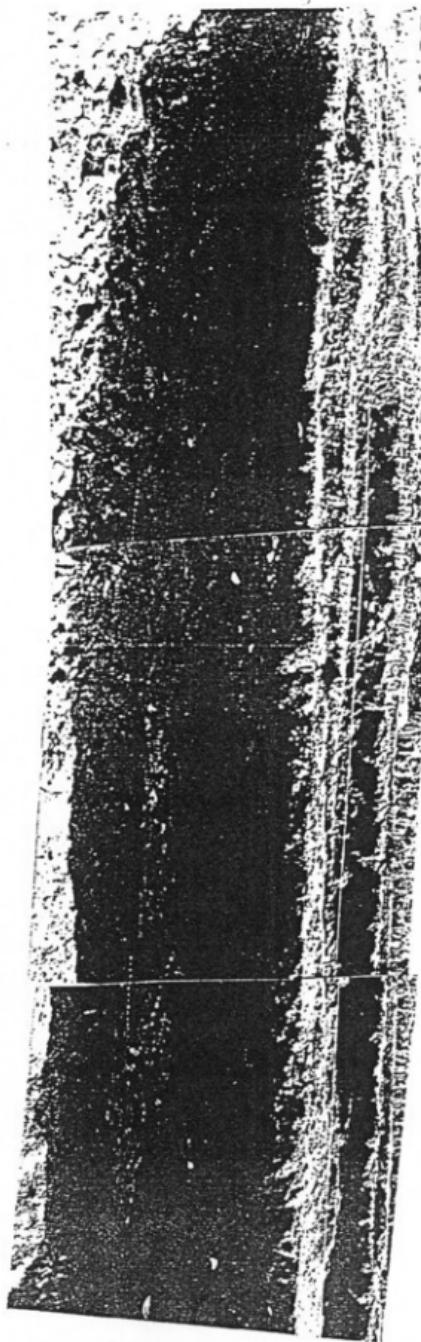
発掘調査風景



FUJICOLOR 87

遺跡出土状況(西側より)

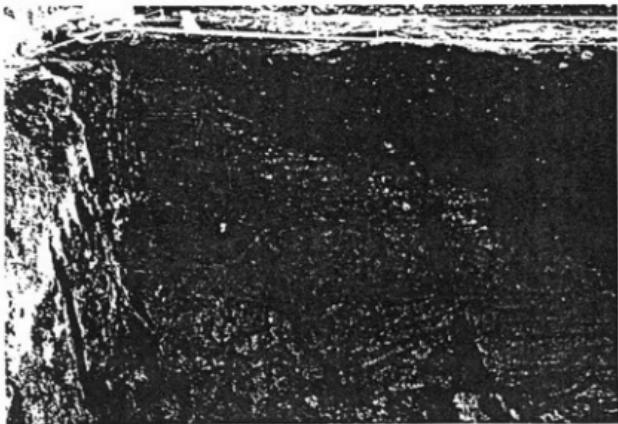
東側セクション



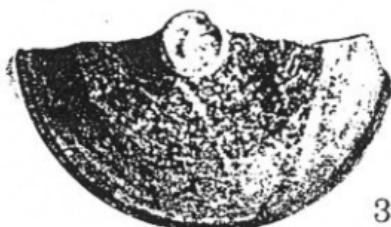


FUJICOLOR 87

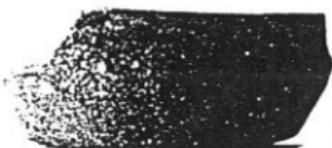
東側セクション



FUJICOLOR 87



3



7



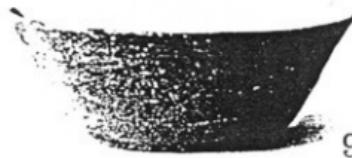
4



7の底部



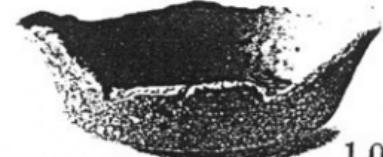
5



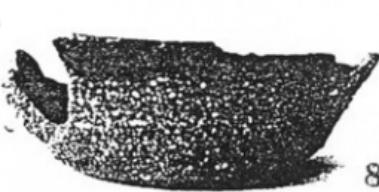
9



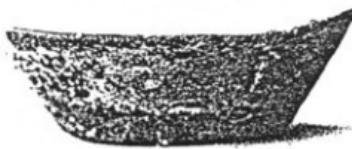
6



10



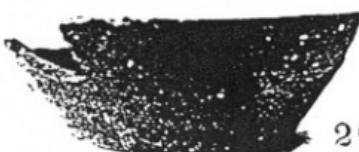
8



14



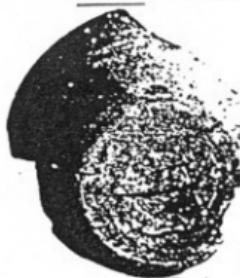
11



20



11の底部



20の底部



15



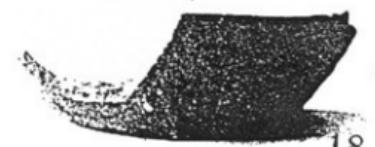
21



16



21aの底部



18



24

灰原出土置物(2)



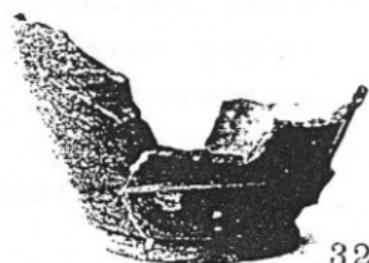
22



29



22の底部



32



23



34



23の底部



25



参考資料 12

灰原出土置物(3)

5. むすび

笠間市長呂比地先の現道路敷の小範囲の発掘調査で、窯跡Bの性格・特徴については、明らかにすることはできない。今回の発掘調査の限りでは、本窯体は須恵器生産のための登窯前庭部から、灰原に続く遺構の一部とも思われる。

登窯とは、丘陵斜面に舟底状をした焚口から燃焼部・焼成部・煙道へと続いているのが一般的である。昭和61年7月から10月にかけて、笠間市市史編さん室による学術調査が行われた大淵窯跡Aは、地下約5.5mに焚口部を構築し更に掘り込んだ地下式窯で、地形・地層・風向きを検討して設けられた特色ある須恵器窯跡として注目された。限定された調査範囲のため焚口部・前庭部の調査に止どまり、全窯体を発掘調査することができなかつたのは残念である。

岩瀬町大字大泉に所在する堀の内須恵器窯跡群は、町の西北端、栃木県境の丘陵の東南裾部に残っている。角釜窯跡・扇山窯跡・花見堂窯跡・同東部窯跡・柳沢窯跡を含む窯跡群は、新治郡家関係の須恵器窯跡として、早くから知られた窯跡である。（昭和35年12月県指定史跡）

窖窯と呼ぶのは、窯体を地中でトンネル状に掘り込み、構築することからいわれたが、一般的には、須恵器窯は床面（焼成部）の傾斜度合から登窯と平窯に分けられている。

ここで大淵窯跡群研究において問題となるのは、窯跡A・B・C 3地点との関連性をどう結びつけるかである。3地点とも距離的に近く、三角形の頂点に位置したA・B・Cを直線で結ぶことができる。AB間650m・AC間420m・BC間350mを測ることができる。この3地点の窯跡を同時期のものとすれば、工人の連絡は当然考えられるところである。

そのほか、3地点の出土須恵器の成形・粘土成分による採取地の検討・製

品の耐火度や吸湿性において、窯体構造の差異等の科学的分析似寄らなければ、窯跡A・B・Cの関連性を結びつけることはできない。窯跡Aについては、出土資料の科学的分析（学習院大学）結果が出ている。窯跡B調査においては、市道の改良工事に伴う緊急調査であるので、調査期間・調査範囲・調査予算等の面から科学的処理することはできなかった。

しかし、これら3地点の須恵器窯跡群の存在は、中世における笠間窯業史研究上極めて重要といわなければならない。

おわりに、窯跡群A・B・C 3地点の学術的総合調査の機会を笠間市によって持たれることを願って稿を了したい。

○別記

本調査に当って、須恵器所蔵者の菅井浅吉氏及び茨城県工業技術センター窯業指導所・参考資料遺物実測図を提供して戴いた阿久津久氏、また、御助言を戴いた川井正一氏に深く感謝申し上げたい。

なお、中山仁美調査員の積極的な取組みによって、短期間であるが成果を得たことに対して心から謝意を表したい。また、市教育委員会社会教育課・市史編さん室・市建設課の協力を得たこと、特に調査事務などにお骨折り戴いた鶴沢主査に対しても、ここに記して感謝申し上げたい。

(萩原 義照 稿)

以上

発掘調査協力者名

調査主任 萩原義照

調査員 中山仁美

同補助員 社教 雨海弘之 梶沢幸一 友部健寿

市史 大島貞二 大高彰

建設課 小池昌己 吉井順一 塩田勝己

体育馆 青木秀夫 海老原和彦

